

規準排水量(t)	七七〇	一二一・五
平均吃水(m)	一・四	三・一
最大速力(節)	三六	三五
竣工(年)	一九二二	一九二〇

## 巡洋艦「木曾」 アッツ・キスカ戦

石川県 掛下 清行

昭和十七(一九四二)年十二月十二日、海軍通信学校高等科卒業、巡洋艦「木曾」乗組を命ぜられた。

「木曾」は大湊に入港しているということで、汽車で大湊に向かった。仙台を過ぎたあたりから沿線に雪があり、大湊線に乗り換えると一面銀世界。鉄道の古い枕木を燃料にしたストーブが客車の中程にあり、ストーブを囲んで、のんびりした旅行であった。

大湊に着いたら「木曾」は出港後であり、大湊防備隊に仮入隊、昭和十七年十二月十三日仮入隊の水兵を指揮して、演武場のガラス拭きをしているとき、「木

曾」は舞鶴に入港したと知らされ、陸行で舞鶴に向かうことになった。

実家が途中にあるので、普通列車に乗ったことにして急行列車に乗り、時間稼ぎをして、なつかしい父母の顔を見て行こうと思ひ、青森駅で父母弟妹の土産に青森りんごを買い込んで急行列車に乗った。

北陸線粟津駅で下車、普通列車との時間差の約半日を実家で過ごし、敦賀駅に着いたのは舞鶴線の終列車が出た後で、敦賀駅前の旅館に泊まり、あくる朝一番列車で舞鶴に向かった。

### 木曾に乗艦

舞鶴軍港に停泊中の「木曾」の舷門を上り、副直将校の若い少尉(後でわかったが通信士であった)に、「掛下兵曹、ただ今到着致しました」と報告したところ、「掛下兵曹、どこへ寄ってきたのか」と詰問するので、「青森で普通列車に乗り、敦賀に着いたら、舞鶴線が出た後であり、敦賀駅前の旅館に泊まって、今朝一番で舞鶴に着きました」と嘘を言って、旅館の領収書を出して見せたところ、出迎えの甲板(分隊の雑

関係の水兵)に案内するように言って通してくれた。

「木曾」での配置は暗号室の次席下士官で、任務は暗号電報の作成と翻訳だけ、海軍七年余りを通じ、一番気楽な配置であった。

親展電報があると、通信士から「掛下兵曹、暗号書を持ってガンルーム(若い中、少尉の執務室)へ来てくれ」と電話がある。親展電報の作成・翻訳は士官の任務で、通信士の仕事であるが、誤字や脱字があると通信士ではお手上げ、時間がかかって満足な翻訳が出来ないので、もっぱら通信士にかわって翻訳し、その都度、下士官・兵には高嶺の花である、士官用酒保物品の缶詰・羊羹・赤玉ポートワイン等を頂いていたものである。

#### キスカ・アッツ輸送作戦

乗艦して一週間、昭和十七年十二月三十日、正月を前にして「木曾」は風雲急を告げる千島列島の北端、幌筵にむけて舞鶴を出港した。冬の日本海は荒れ狂い、艦首に砕けた大波は前甲板を洗い、艦橋を被う。宗谷海峡に入ると一面の流水、その裂け目をたどり、

ゴトンゴトンと艦体にあたる流水のうす気味悪い音を気にしながら航進する。

オホーツク海に入ると、黒船は完全に白衣に変装、猛吹雪の中を一路北へ北へと進む。暗号室はスチームがきいて暖かいが舷窓の外側には十センチ余りの氷が付いて、上甲板で防寒帽・防寒外套・防寒靴で身を固めた水兵が、ハンマーで艦体に凍りついた氷をたたき割っていた姿が今もまぶたに浮かぶ。

冬の幌筵は吹雪に明けて吹雪に暮れる酷寒の地であるが、稀に太陽を見る日があり、ソ連領カムチャツカを望む、帝国北端の要衝であり、北方部隊五艦隊の根拠地でもあった。

幌筵に到着早々、駆逐艦「若葉」と、キスカ島行き の陸兵輸送の任務を帯び、北太平洋の荒波を乗り切つてキスカ島に向かったが、キスカ島突入の前日、敵に察知され、涙をのんで引き返した。

一月中旬、陸軍輸送船「埼玉丸」「春光丸」を、駆逐艦「若葉」「初霜」と護衛してキスカ島に向かった。まれに見る好天に恵まれアッツ島西北を北上中、味方

の水偵が敵艦隊を発見したので、船団はコマンドル方面に敵艦隊を避けペーリング海を北上し、遠まわりしてキスカ島の北方二〇〇マイル附近でキスカ島に進路をとった頃、敵艦隊はアッツ島を砲撃し、キスカ島方面に向かうおそれがあるということで反転北上し、再起を図ろうとしたが、長期の航海で駆逐艦の燃料が少なくなり、やむなく幌筥に帰還した。

二月に入って巡洋艦「阿武隈」、駆逐艦「電」「薄雲」は「君川丸」「栗田丸」「埼玉丸」を護衛、アッツ島に急速補給することになり、「木曾」は重巡「那智」「摩耶」、軽巡「多摩」、駆逐艦「若葉」「初霜」と輸送船団を援護し、敵艦隊出現の際は、これと決戦を交えるため幌筥を出港した。

まれに見る好天で、水平線上に輸送船団を望みながら、艦隊主力は「之」字運動で航進しながらアッツ島に向かっている時、お昼頃西方にソ連船らしき船影を発見、右一斉回頭でこれを避けた。

午後、艦隊司令部から、アメリカ陸軍機がアッツ島附近に不時着し、海軍機が救助にあたっており、敵艦

隊もアッツ島附近に行動中であるという情報があり、今度こそ敵艦隊を撃滅するぞと、総員戦闘配置につき、土気極めて旺盛、血わき肉躍る感じであった。

ところが、日没とともに風が強くなり、三十ないし四十メートルの突風、海は荒れ狂い、「阿武隈」で二人の遭難者を出したのはこの時であった。荒天のためアッツ島突入は一日延期され、予定日の翌日午前九時頃、第一水雷戦隊は輸送船団とアッツ島に向かい、午後六時頃無事入港、飛行機・飛行場資材・弾薬・食糧等を揚陸し、午後九時頃出港した。

その間、第五艦隊の主力は、本艦と「多摩」を前衛とし、「若葉」と「初霜」を直衛とした決戦態勢をもって、アッツ島周辺にある敵艦隊を求めて索敵捜航した。輸送船団がアッツ出港後、「薄雲」「八丈」「国後」は船団を護衛して幌筥に向い、「阿武隈」「雷」「電」は本隊に合流、ひき続き索敵につとめたが、駆逐艦の燃料が限界に達したので、やむなく幌筥に引き揚げた。

キスカ撤収作戦

流水と荒天で傷ついた艦隊の修理と補給のため、「木曾」は三月十日舞鶴に帰港。共楽公園の桜を満喫し、英気を養っていると、突然、北千島に敵機動部隊出現、「木曾は直ちに幌筵に進出せよ」の命令があり、四月二十八日早朝、なつかしい母港を後に一路作戦地に向かった。日本海からオホーツクの海に出て、白峰・幌筵富士を眺めたのは五月三日の午後であった。

この頃になると北千島には濃霧が発生し、晴れた日には雪解けの山腹に緑の影を見るようになり、この濃霧を利用して、キスカ・アッツ島への輸送作戦が続けられていた。

五月十二日、アメリカ軍はアッツ島に上陸を開始し、北方部隊はアッツ島の救援と、敵艦隊撃滅のため全力を尽くしたが、荒天と優秀なアメリカ軍のため戦局は我に利はなく、山崎保代部隊長の率いる陸軍のアッツ島守備隊は勇戦敢闘、五月二十九日夜、部隊長を先頭に最後の突撃を敢行、アッツ島は完全に敵のものとなった。

敵はアッツ島に水・陸飛行場を造り、クルック・ア

ムチトカの飛行場とともに、キスカ島に対して、空からと艦艇による哨戒を強化して補給を遮断し、砲爆撃を反復して、キスカ島奪還を企図としていることが明白となった。

大本営では潜水艦によるキスカ島撤収を決定、それまで北方部隊の潜水艦は五隻であったが十三隻に増強し、霧と潜水艦の隠密性を利用して、兵器弾薬と食糧の補給を図りながら、人員の撤収を開始した。

その頃になると、アメリカ軍はレーダー射撃を完成し、日本の潜水艦はレーダーで見えられ、敵の至近弾は艦側で水煙をあげ、潜航すれば爆雷攻撃を受け、ために潜水艦は隠密性を失い、運を天に任せて任務に邁進するという状況で、被害は増大するばかり、ついに潜水艦よる撤収は取り止め、巡洋艦・駆逐艦で一挙に撤収することになった。

#### 奇蹟のキスカ撤収

昭和十八年七月二十二日午後八時、暗夜の濃霧の中を、燃料補給船「日本丸」を伴い幌筵海峡を出撃した撤収部隊は、敵潜水艦の目をくらすため進路を真南

にとる。

翌日からは霧の状況と敵潜の動静を気にしながら、「阿武隈」「木曾」「島風」「夕雲」「秋雲」「風雲」「朝雲」「薄雲」「五月雨」「長波」「若葉」「初霜」「国後」「日本丸」の単縦陣をもって、針路を東に西に、あるいは南に北へと変えながらキスカ島に接近中の二十三日午後三時頃変針中、「国後」が変針時機を誤ったのか隊列から離れてしまった。それから二十六日まで、敵潜の警戒に加えて「国後」との合流が心配となった。警戒航行を続行中、午後五時頃給油予定海面で、突然「阿武隈」の右前方に「国後」出現、衝突した。そのため隊形が混乱し、「初霜」「若葉」「長波」が触衝し、「若葉」「初霜」は最大速力十二ノットと低下し、予定作戦に参加不可能となったため「日本丸」の護衛、「国後」は損傷が大きく十ノット以上の航行不可能ということで単独帰港となった。

二十七日最後の燃料補給を完了、キスカ島に向針し、二十八日午前七時、旗艦「多摩」から「鳴神（キスカ）港進入、任務を達成せよ、成功を祈る」の手旗

信号があり、第五艦隊長官の見送りを受け、突入部隊は「木曾」艦長の指揮により、一路キスカ港に向かった。

午前十時キスカ島に接近、突入隊形をもって防衛航行に移り、十一時にキスカ島を発見、敵のレーダーにかからぬようキスカ島の西側を海流に逆らって航進した。暗号室の舷窓から見ると、大河の奔流を遡るよう、先導の駆逐艦が高波を乗り越え乗り切り、艦尾を右に左に振りながら白い航跡を曳いて進む。「木曾」の艦首に砕けた高波が前甲板を洗い、艦橋に飛び散る光景は、臉に残る一こまである。

やがてキスカ湾に入ると、あれほど濃い霧がきれいに晴れて、海岸に待機中の引揚部隊と陣地・兵器を爆破して山から駆け下りる破壊班の姿が手に取るように見える。午後一時四十分、投錨と同時に守備隊員を乗せた大発が続々本艦に横付けする。

今回の撤収は軍人軍属だけ、兵器その他一切の持ち込みは禁止されていたので、陸軍の兵隊は本艦に乗り移る直前、持っていた三八式歩兵銃を両手で捧げ、押

むようにして海中に投棄する。

この光景を艦橋で見ていた艦長から、三八式歩兵銃だけは持ち込みを許すと命令が出た。この時は陸軍の兵隊とともに、目頭に涙を浮かべたものであった。

午後二時二十四分までの約四十四分間に、海軍准士官以上一二人・下士官兵二五〇人・工員二四人、計二八六人、陸軍峯木司令官以下准尉以上六二人・下士官兵八四一人、計九〇三人、合計一八九人を収容。全艦艇の陸海軍合計五三〇〇人を収容すると同時に揚錨し出港した。

警戒隊「島風」「五月雨」を前衛に、輸送隊「木曾」「朝雲」「薄雲」等がこれに続き、午後三時三十七分、瞬間的に霧の晴れ間にキスカ富士の頂上を見て、北の最前線から濃霧の中を二十八ノットの全速力で西方に脱出したのであった。

二日後、午後三時五十七分、幌筈島片岡湾に投錨、収容人員の揚陸開始、午後五時三十五分揚陸完了、ここにキスカ撤収作戦は成功裡に終了した。